多田孝泉

略解古事記

五

和書
一〇五三〇號
月廿七日

和書門
類 一〇五三〇
號 一〇〇
函 一一
架 六
冊

内閣文庫
和書
類 一〇五三〇
號
一三七 函
二 架
六 冊

内閣文庫
番號	和	10530
冊數		6（ 5 ）
函號	137	22

国立公文書館
National Archives of Japan

日本政府図書

国立公文書館
National Archives of Japan

略解古事記の序

[illegible]難波の大隅宮[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]大和[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]泉法[illegible]法蓮

[illegible]

丙 一二六七七號

きことわく神代の巻あります
真似ゆる事の書ありて人に伝へ
せしより神仏二道の義をも説
出し人々こゝに定め天の道
人の道の識りしものはなくも
いかなるにも明らかに年の内月
日々はそれぞれゆりて七日の
説を立てる本に於て謹み述の
へまで法にある女神使者

皇統ことにしも此の二千餘人
年経て人々里をとまり西暦にて谷底
三大日本の神々ありてのせ給ふ
の伴人々にしはるかにとも
見るこの書の開山
時代四十五年に大成
圓年七年春刊

略解古事記序

天地覆載日月照臨古數歷歳
而字未有萬事傳傳於口宴安乎
此中古遣土皆陽號宛尼危名兒
山崇高安之大飛乎雲山宗多國

孝泉上人若法以象能也以其捍法
明達皇猷二教兼其權實知
履在聖意若書題曰略
解古事記其一二編既已上梓次又
其三四編來需序覓之煩以筆仙

或說裨補國教大去古賢之度
只見其說實為保切為於後之學
徒乃此書寔意剏庭得通意答
之新饒世山空花宜既深可得
如佛者然則上人者一所謂大

爲之人希哉可與語於此乎龍次乙
亥三月識于淺草僑居
三秋靈源

略解古事記巻第五

神洲　天台沙門多田孝泉　謹略解

於是欲相見其妹伊邪那美命。追往黄泉國。爾自殿騰戸出向之時。伊邪那岐命語詔之。愛我那邇妹命。吾與汝所作之國未作竟。故可還。爾伊邪那美命答白。悔哉不速來。吾者爲黄泉戸喫。然愛我那勢命。那勢二字以音。下效此。入來坐之事恐。故欲還。且具與黄泉神相論。莫視我。如此白而還入其殿内之間。甚久難待。

故刺左之御美豆良三字以音下效此湯津津間櫛之男柱一箇取闕而燭一火。入見之時。宇士多加禮斗呂呂岐弖。此十字以音於頭者大雷居。於胸者火雷居。於腹者黒雷居。於陰者拆雷居。於左手者若雷居。於右手者土雷居。於左足者鳴雷居。於右足者伏雷居。并八雷神成居。

記傳六号初 於是欲相見其妹等とは那岐命火神が生ミたまふによりて遂に神避坐し那美命がなくし比婆の山に葬しまゐつる後たゞ獨何くれと妹命がこひしぬびおもふぜひのあまり迦具土神が見まし此一児の為に我愛と思ふ妹命が失ひつることよと御いかりがおこし正しき御子にまして火神がかしこくも斬殺したまひ一時の御怒をば遣りたまふといへどもそれより神避ませし妹命の立かへりたまふまもあらねば起ゐくろ寝ゐくろ蚊帳のひろさかのなどかの千代女の妹背のあかぬわかれがなげきつる御心いやまし是に於て此國と黄泉とはそのかひのいさくつゞくしりたるをもいとひまさずもろともとちぎりし妹がさきだてくれひとりやはとてまゐるべきと人にも語りえぬ懇の暗路がたゞ獨とふぐまもたどりまし

山がぬくたけきちからもあるものが戀にはなぞてかの
ひなかるらむと大丈夫の御身にとりてうらぢかかし
くはあれせどなか妹命にあとかれましつひに黃泉國に
で追ひ往きたまひしとふことが志かく志るせしものに
そこは即是ぞ夫婦かたみにかひおもふ真情のきそみが
人艸の為かくばかりさまに示しおかせましたるいとも
たふとき御神業なり愛情にひかれては地獄なる針の山
劔の峯をもいとをぞさまよふひのがるものぞと佛經の中
にもとけり世の中に妹背の事業よりして親がもうとく
子をもにくみてそのかひなくなりつひにそむりさら
に大禍事のいできてかなしみはかりやまかりぬうきせは
おちたづぬるものにてありけるなる二命の御神業は全
くさるおぞましかふかくつつしみかしこそまとの御い
ましめぞと知るべし黃泉は鎮火祭祝詞に下津國と見に
此記に根之堅洲國と見ゆれば大地の底なる國と知られ
たり其名義は春の夜のやみはあやなしまこと夜もをかく
たかぐなぐあるが如くヤとヨとモとミとはかよへる
言にてヨモといふもヨミといふも同じ意にて日の御光
のいたらぬくらき所ゆゑいつも暗の夜の如き國ぞとい
へる意なり黃泉は左傳一弓四に遂寘姜氏于城潁而誓之曰

不及黄泉無相見也とある註に地中之泉故曰黄泉とある
文字を借用ひて地の底なる國ぞといふことを知らしめた
るなり天國と中國と黄泉國といづれも神々のもとある所
なれどその中に黄泉は下劣の國にて那美命の如く御身
を棄てもいでましまた須佐命の如く現身にてもいたり
ましまた那岐命また大穴牟遅神の如くゆきてかへりき
ませるもありと見えたりしかるに萬葉九卷に遠津國黄
泉乃界丹又卷雖生應合有哉宗串呂黄泉爾将待跡云々ま
た孝德紀に望黄泉尚懷忠退など見えまた源氏夕霧巻に
よみぢのいそぎなどいひ今の世に蘇生したるものをよ

みぢがへりする人といひ世人の死してゆくべき國の如くい
ひならへるは那美命の御身を棄ていでませしことのふ
る事によれる世のいひならはしになむありけるこの黄
泉國を佛家よりいへばうづなく鬼趣の一所と思へるし
なりそのゆゑは次下にしるすべく見えたり記傳に貴きも賤
きも善も悪も死ぬれば皆此夜見國に往ことぞといへる
は善悪の因果をしらざるひとむきのときごとなれば今
とらざるなり天照大御神を高天原へ送りあげ素戔嗚尊
を根國へ逐ひたまへる神業にても善悪の因果そのむね
いとあきらけし神々の御身にはおきてまでにしらせば凡

人の現身また亡靈のゆくへにおきてもまたしかるべし
纂疏上百二に黄泉左傳注曰天玄地黄泉在地下故言黄泉也
如外書說則不言死人而更稟此形其爲神者獨氣而已鄭莊
公闕地及泉與母相見非此義也故以佛教之意可證今書黄
泉則地獄也伊弉冊尊死而葬其屍於熊野有馬村然後陽神
入泉相與晤語蓋其爲化生明矣等といへり佛家の經論が以
て我神典の正真なる神業の深旨が助顯し以て國民に皇
國の實信が發起せしむべきことを兼良公の説まことにう
べにこそけれどし黄泉が地獄といへるはいかゞ考ふべしむかし
の人々は神儒佛の三道ともかくみに信受して其徳功が

助顯し以て世人が利益せんことがむねとことひのくしが
今時の人はかゝみに其功がうばくむことがのくまてに
おもふべおゆかるぞかなしこのこと教導職に在る人々
はまさておもひ志ぬびかくみに其徳功が助顯し以て國
民が一和の妙域に誘引すべし皇太子の憲法にも第一に
以和爲貴无忤爲宗とあるぞかしさて爾自殿騰戸出向之
時とある騰戸が延佳本又一本には縢戸と作て久美度と
よめるは非なり一書に欲見其妹乃到殯斂之處とあると
仲哀巻に无火殯斂此云褒那之阿餓利とあるが合て見き
ば殯斂の意に騰と書るかの若然らば騰殿戸を下上に寫し

誤れるなるべし又本のまゝにて殿騰戸とかされどおぼつかなければ姑く此一字をば遺て三字をたゞ登能度と訓つと記傳にいへり此説ひとすぢはむねあれど殿戸へたゞ開くものとのみおもへるものゝいふなりにて一書によれば騰を殯斂と見まほしかるも今記には明けく比婆山に葬しまつるとあればかりもありの殿戸ともいひかくしよりて文字の如く自殿騰戸とよむべし出向は出迎なり紀の一書に伊弉諾尊欲見其妹乃到殯斂之處是時伊弉冊尊猶如生平出迎共語已而謂伊弉諾尊曰吾夫君尊請勿視吾矣言訖忽然不見于時闇也伊弉諾尊乃擧一片之火而視之時伊弉冊尊脹滿太高上有八色雷公とあるを纂疏に殯斂者死人未葬之稱此未必爲地下之事伊弉冊尊如生平出迎者其於生死得自在如其業報神則豈得如是神力哉脹滿太高謂九相變壞也八色雷公者怒之象八方之色如東青南赤等之類也と釋せりこの一書にて見れば男神の女神にあひませしは地下のこととももおもはざるに似たれどこはいはゆる神業の不思議として神世よりの古傳の不同また感見不同の一説なるべしけだしこれかれをとりあはせてこのさまをひとすぢいはゞ男神のうせたまひし妹命をこひ慕ひたまふあまりそのなきがらを

さらに見まほしとおもほし殯斂（アガリ）の所（トコロ）にいでませしなりそのあさましくなりぬる御身が男神に見られむことが女神の真情（ミコヽロ）としていたくいとひはし殯（アカリ）の宮より生平（ツネ）の御すがたもてかへられいでゝ吾身（アカミ）がな見ましそとのらくことゞもたまつるが男神のことさらにひとつ火ともしてその宮内（ミヤヌチ）にいり女神のなきがら實体が見ましていとくのしこみにげいでたまふにより女神の御身が見そぷこのしそられさるがふかくそお御いかりましてよもつぐのこころありしにてそのことのそじめは殯の宮汁ところありしがいつしか全くの黄泉戸（ヨミド）となりてそよりこの御

國へにげのがりましつるをそりのところはせなそち出雲の伊賦夜坂（イフヤザカ）にそんかりきといへるさまにおもひかるれどこは君やこしわれやゆきそんおもひわかねど古歌にかるがごとき難思の神業のことにしかきばひとむきにはいひがきことなるべしむかしいまの世人のまれにおもひがてき境界のかりさまが風と夢れ如くに感見しつることがいやまとの書にしるせしさまとてなる神業とよく似たりゆゑにこがもてこれがおもひこれがもてこがしぬびて信がとるべきなり語詔之等とは妹背の愛情にひかれて追來（オヒキ）ましたるなれどそをばかくしてねもご

ろはこのくらひのりたまふには天神諸の大命もてあなり
汝(ミマシ)とともに國をばまだ生をへぬほどいまだそがよ
く作(ツクリカタ)堅めをへねば立かへりてもろともに其功を全くな
してんことがなしてよかしあのきひとりにてはえなし
がたければとてまづそろそろとゝまりしが迎ふことをきつゝも
とすくしあかぬ詔もて妹神が誘ひたまふなりこれ男
の女が巧に誘ふ真情の正(マサ)しきなりさまなり上に為(シ)生成(ナス)
國土(ヲ)奈何(ニ)とあるところは吾與汝所作之國未作竟故可還
とあると下に大穴牟遲與(ト)少名毘古那二柱神相並(ヒ)作(テ)堅此
國(ヲ)とあるとを考(ヘ)合せて文の意が知るべくまた語詔とあ

る語の字と詔の字とをもて男神の巧に誘ひたまふ男の
情が知りまゝ女神の情をばことゝに答白志らぐとあると
次下に言(ニ)令見(ヲ)辱吾(ヲ)と志らぐある白言の二字をもても知
りぬべし女男ともに心のいそのれるときとつしゑるを
りとはてその詞になるやあるとなるやなきとのたがひある
ぞかし悔哉不速來吾者為黄泉戸喫とは男神の御言がき
かしてさぞありふかくおもほしたまふことにそへらば
そやくきましてそがはつげさせたまはずとそはまた
ちかへり國作(クニツクリ)の御いさをしがたきけまゐらせんかるが
さりとてもくやしきかもすらかにさるこころも心づかね

べくはきこりこの下津國にてものせし食物がもてに喫たべりて此國の者となりをへぬれば今そこたちやせくことこがさちさりがたくなむはべると御答が白て男神のとくきまさぬこともかくやしきよしもとをこのたまへるなり記傳六卅七に書紀に湌泉之竈此云譽母都俳遇比とあり閇とは即竈のことなり戸字が書は竈が本にて民戸をも然云故なりさて黄泉戸喫とは黄泉國の竈にて煮炊たる物を食が云り是なむ火が忌清むる事の本なりそる纂疏印本に俳が非と作るは誤冩なり俳がふるくより比とよめるはまろしこは閇とよむべしと志このぐいへり黄泉の

物はたゞ火のけがれをなべて汚穢の物なり故に男神の御身に著る物がくな投棄たまへるにこそ今の世に火が忌清むるもそのもとは死穢等にふれさるその汚穢が忌清むるなりこがたゞ火のことゝおしへる人しもがるはひがことなり何にても汚穢にふれたるものをばくな忌清むべきなり僧徒が不浄の者とて神宮にて忌たべるも死者がとりあつかふよりいへるがもとなり白衣の人とても死穢産穢等に觸きさるものは不浄の者なり神宮にまゐらむことゝいとつゝしむべしまをしては戸喫のことがのさまへるは鬼趣の法がのさまへるにてたゞ穢の

ぐる物が喫(クヒ)たるゆゑにといふのみにてはなきなりこは鬼
趣の法として生かへりこの趣に入たるものは此趣の食(ヲレ)
物が喫と其群(ムレ)の者と定りてたやすく其趣が出がたきが
即(ナ)是も鬼趣の定まる法なるがゆゑにすなはち戸喫の事
がもてたやすく御國へ立かへりがたきことがのたまへ
るなりこのことあのきまへつゝ慧澄和上にきゝけりそが
をり我神典はさりとても正しき神業の實事が志るした
る御書なりき佛經なる鬼趣のことがきしるへりく神書
なる戸喫のいぶかりとみにそるけなりこがたゞ火の穢(ケガレ)
とのみいへる說どもいまだ鬼趣の法が知らざるが故な

りとおもひきけらし火がことさらに忌清むるは食物に
つきてのことはなむありける我神典なる黄泉は佛經な
る鬼趣の一所なることを此一事もても知りぬべしいそん
や次下に豫母都志許賣(ヨモツシコメ)が蒲子が摭食笋が抜食まにく桃子
の為に逃返せることすらく男神の唾(ツバキ)なきき志るしとまへること
ら皆是鬼趣の明證なるをやよりてこが佛經なる地獄と
同じさまにいへる說は三界六道のまゝのあがいまだよく
志らざるにこそ我神典と佛經と符節が合せざるが如く
天上にも地下にも海底にも國ありて神たちすまへること
とがらけるぞまことはたゞふとき實說になむありけるこ

こがもてまろハ神典によりて佛經が信じ經説によりて
いよく神業が信じ得たり佛經には極樂といひ地獄といへも
神典には天國といひ根國といふもせんなるところ凡人の
智目が以てまのあたりそが見て知るべき所にてはなく
こはたゞ神語と佛語とが信受奉行せるまでのことにな
むあるぞされでにしあらば神國に生が受たる人ならば神
典が第一に信受しましてのち我神典とゆとしある利國
利民の正教ならば其教法が信用して我神徳が助顯し以
て蒼生が利益せべきなり若我神典が妄説の如くおもは
しむるにいたる教法ならば教理の邪正得益の有無があ

げつらふまでもなく皇國の神民に信受奉行せることが
ひさぶるにゆるさぶし是し自國の爲に他教があらぶ大
綱なるぞかし然愛我那勢命入來坐之事恐故欲還とはまそ
でに戸喫しつればたちかへりがたき身にしあれどこでま
ぞ那勢命の入來坐せるその事のいとかしこければあの
しの心にかへらんとありけれどこはたゞやすからぬこと
ゆゑつとめそのあしたゞごとなき國作のことにきがつ
ならかに黄泉神たちとあひあげつらひましして御國へ
立かへりまさんなどまことおもひはことにて御よこのれには
かへりなむ我那勢命にが視むとおもひしこの殿戸の内

になゐりましそと男神をかたくいひしらしましつるがき
なそち死しての後までもなほ身の穢(キタナキ)さまをば男に見せ
じとせる女の情にて「旦具與黄泉神相論莫視我」といへる
十一字の意なりこの旦字を一本に且と書るは後人の寫誤なるに
心づかでそをマタとよみマツとよみシパラクなどゝよめる
は皆わろしこは稲葉通邦がアシタとよめるぞよろし平田
ぬしがなほシパラクとよめるは具の字の無き本により甚
久難待とあるに眼をつけざるよみなれどたゞシパラクと
いひては言のかろくきこえてわろし餘人のシパラクとよめ
るはシパラクツブサニとは言のつゞかぬに心づかぬあやま
りなりけらしアレタとよむぞよけれど日の光のいたらぬ
國に夜る晝るのわかちありやといふいぶかりあれどそ
はかれ日月の光をからざる極楽にて蓮花の開合をもて
夜る晝るをわかつが如くその處々にてそをわかつなど
のことはおのづからありぬべくされば此國のさまをもて
ひとむきにいぶかりあげつらふべきことにあらじと知
るべきなりまた鳥毛(トリケ)ものなど夜る目の見ゆるもあれば
黄泉の神々は日の光をからずとも其國におきては事
たりぬべくまたよくといへばとて黒暗地獄の如くにても

なこのるべしそハ大國主神の黄泉へいぐくましたるをりの
さまにてもさとるべきなり紀の一書に伊弉諾尊追至伊
弉冊尊所在處便語之曰悲汝故來答曰族也勿看吾矣伊弉
諾尊不從猶看之故伊弉冊尊耻恨之曰汝已見我情我復見
汝情時伊弉諾尊亦慙焉因將出返于時不直默歸而盟之曰
族離又曰不負於族乃所唾之神號曰速玉之男次掃之神號泉
津事解男凡二神矣及其與妹相鬪於泉津平坂也伊弉諾尊
曰始爲族悲及思哀者是吾之怯矣時黄泉守道者白云有言
矣曰吾與汝已生國矣奈何更求生乎吾則當留此國不可共
去是時菊理媛神亦有白事伊弉諾尊聞而善之乃散去矣但

親見泉國此既不祥故欲濯除其穢惡乃往見粟門及速吸名
門然此二門潮既太急故還向於橘之小門而拂濯也と見に
さりこゝをよりてみればもとよりこのへりまさしと御心に
おもほしなごのこのへりてんざまにしも此記にあるは男
が妙にいとりかつこのふ女の情体なるべし女男の情体をば
ことまて人そなよくおもひさとるべくやあらん一書に
汝已見我情とあるがこれところが見ゆるなりと平田ぬ
しのいへるはまらふべし御國に女男のちぎりをおもひきて
てをむる佛法のひろごれるもまさくとてなる神業のふ
このくたふときことわりはうなへるによれることにて

れまたく天神諸の大命もて御國がものせしそちるそが
大命の一分にてもすなはち天神の蒼生が神域にいさなひ
ていとめでたくいときよき神徳が證得せしめむとあが
したまふ神意より御國に佛法はひろごれるものぞと知
るべきなりかしこけれど天之御中主神また天照大御神
の如くそれより女男のまにそりがなしましまさでまた那
岐那美の二命の如くひとゞびは女男のまにそりをなし
たまふといへどもこがひくぶるにたちましまた天孫の
如くひくぶる女男の神業がもて人草が生べをさそてい
ざなひたまふこゝろくそなやごとなきことまりゐること

にていづきもふかき神業なるぞかし凡人はたゞその
うちのみが見てその神理と神意とがえさとらぬがお
ぞしと知るべきなりもしよくこの神理がさとりて神意
が得るときは女男のまじそりがなまとも神道なりとがた
ちてなさゞるも神道なりあにたゞ鈴が振て祝詞がよむ
のみが神道ならんや今日かしこくも天朝にて執行ひた
まふ御政事即是我神道の真面目なりゆゑに神意が以て
なせば士農工商も神官僧侶も一様に神道が信受奉行をそ
る真實の神民といふものなり若神意もなく神理にそむ
きてたゞ自己の邪欲が以て事がなさは祝詞が讀とも經

文が誦とも皇國の神官僧侶とはいひつぎしよりて上農
工商もまさに志るべき事故に此ことをよりがねもごろに
國民にをしへさとすをかきなちち教導職のむねとしつと
むるところなるべし法師はたゞ佛經がよましめむとえ
このり神官はたゞ祝詞をよませんとすつるはいとをろ
しき心のまへなりやあらんよくしるしてつふべしさて平田ぬ
しは古史徵二卷に或人の志うべくといへるが答へべるとて
阿夜忌はしき問言しのもそば神魯伎神魯美命の御傳へ坐
る鎮火祭の太祝詞が讀奉りて古事記書紀なる傳へどもは
早く混亂たるなることが曉り得つればなりさるは彼祝

詞なる傳への趣は上に記せる如く伊邪那美命の豫母都國
に往坐るはその御產の後のいみじき御有狀が妹神の御
覽し給へることが恥給ひて御面が合せたまはずしてと所思
食し妹神の御許が離避て現身ながら往坐るをや此正し
き傳へを得つるよりへはなど餘の混亂たる傳へどもに心が殘さ
むさるはまづ神避てふ語が死ることがいふ古言めごと
云說の由來しはいと久しき事にて此は豫美といふに西
戎國の文章語なる黃泉字があてく伊邪那美命はその黃
泉に往坐ると云るより其は死坐しその事と非心得しつ
るまゝに彼神の離去り給へることが妹神の悔みて匐匍

哭たまひし其涙は泣澤女神の生坐るとの傳へがやがて妹神
の尊骸の御枕方御足方に哭吟ひ給へることと思ひなし
くひとのなる嗚呼の中世人が如此も言傳たるよりなほ訛
に謬がうちかさねつゝ其尊骸が葬奉るは此所ぞ彼處ぞ或
は殯斂之處など語り傳へて可畏とも可畏く見るも聞く
も身の毛たつばかりなる胡亂說どもの廣ごれるはいと
も慨く憤しく哀など云もさらなるをかく辨云だに心痛き
わざになむといへり須佐命また大穴牟遅神いづれも現
身にて黄泉國へいでませしこと此記にかけば那美命も
現身にていでませしといはんも神の御身におきてはさ

まくさけなきのるべし故に鎮火祭の祝詞の如き一の傳も世
にありしなるべしけれどかの祝詞は紀の一書によりて
後の世人のものせしにやあらんそはともあれかくもあれ此
記がしてかゝまりがたるしつゝへさるが如く爲亂がい
へるはうつくなしかるかげつらひといふべし那美命は生死
に於て自在が得たまへる大神なり故に御骸がそこに留
め置てこのれにいでませしとそ何のことをりにたべのへる
ことかるんやのくてこそあへりて神業のいとくしきこ
とはいふべるべきれなき記主は須佐命は現身にてかし
こにやらそきまし那美命は御骸が比婆山にのこしとゞ

そそのしこへいでませしゆゑにしのしるしたるなりと
まをき何のきこえざるところなりや神の御身に死せる
ことなるなのしは天衣織女天若日子等にてもそのむね
しるつることとなり大神の御歎かのへたまふ九人の衣か
ぬぎこのふるよりもいとやまそのることなるべし若しこのら
ばなを可畏(カシコ)伊邪那岐伊邪那美二神の中に一柱も崩御(カムアガリマ)し
なば此世は忽(タチマチ)に滅(ホロ)ぶべき物ぞあなこのしこと平田ぬしが
なげくるへあなをうしきことまことそまさく此世界になりと
なるなどの國々かくなき二命の生成たるさまにいつそゑる
人しもなもどそは事か廣大にさんへいとなかば我神德か

ならくもものぞとおもつるひぞことなり黄泉國の如き
までに是二命の生成たまへる國にならざるかもて海外
の萬國をもおして知るべし二命の生成たまへる御國は
たゞ皇國にこのぎれる故に小國といへども大理か存りて
獨萬國の中に於て神國と稱せるところなりこの大理か
萬國の人民までにをしへさとしそむべるや教導職たる
者の職掌なりんよくこのことぶふべしさて還入其殿内之間
とはまへに出向とある殿戸の内へうへり入ましゝるな
り甚久難待とは旦具にながげつらそんとのくまへるその
なしさかまちうねたまふかいふなり中ッ國と黄泉とは其

晝夜等に長短のたがひもありぬべし、さることも佛經に見えたり何となきことどもにまづはものうきがましくて悲しき妹の命があはれきやなけよと鶏が妹が為なげきよみどにまうさむものとは御美豆良のこと記傳六十に御美豆良は上代に男の御裝にて髪を左右へ分て結綰たるものなり下に天照大御神の解御髪纏御美豆羅とまふすがあるも假に男の貌と為たまふなり又崇峻紀に古俗年少兒年十五六間束髪於額十七八間分為角子今亦然之とある此角子即美豆良なり十七八間とあるはやゝ後のことなるべし角子があげまきと訓るは後の稱なり即みづらさ

訓べし萬葉七八に角髪とあり左右にあるが角の如くなる故にかゝる稱は有なり後世に鬢頬と云は此美豆良が訛れる言なり江次第に幼主之時無鬢頬とありといへり美豆良は見頬または耳頬の義なるべくやあらんそのさまは画がきたる牛若丸の髪の如く耳の列に髪をあげて結綰たるものなりけらし大和國なる多神社に坐る神武天皇の神像がをろがみ奉りしに牛若丸の髪の如くにてうしろのかたは御髪の毛御腰のあたりまでながくたれさがれり此神像は實に千古の作とおもはるゝなり湯津々間櫛の湯津は五百箇なり津間は加都麻の上が畧けるな

り加都麻は堅津間にて櫛の齒のしげくさく間の堅くせまきるを云へり櫛は本串と同名なり男柱といふは櫛の左右の端の大なる齒を志かいふなり火ともしといふをもてあらふに上代の櫛の齒はやゝ長かりしと見えたり入見とは女神の還入ましたる殿の内へ入て見ませしなり宇士は蛆字を訓來れり本草てふ書に蛆蠅之子也九物敗臭則生之とあり多加禮は今世の語にすべて鳥虫などの物に多く集まるを多加留と云へることもありけらし多加禮は小兒などの手をいだして母にいだきつくをダカリダカルといへると同義の古言なるべし此記の歌にも多々岐と

ふ言見えたり斗呂呂岐弖とはトロケトロケテといふことなりその言のさまをば薯蕷汁を斗呂々と云にて知るべし書紀に膿沸虫流とあり膿字をウナとよめるはウアとありし片假字をよみあやまれるなりウアのアは見の字の草書をそぶけるなりにを阿をそぶるものとおもひあやまれる人もまゝありに記傳に舊印本又一本にハ許呂々岐弖とあり延佳本には斗呂々岐弖とありされど今ハ一本に依りつといへり大雷の雷は伊加豆知にて伊加は嚴なり豆は例の之に通ふ助辭知は美禰なりと記傳にいへり頭ゆゑに大といひ胸ゆゑに火といひ腹ゆゑに黒といひ

陰ゆゑに拆といふ左手の若は字の如く見るもよろしか
るべくまた手ゆゑに別雷と見るもよろしかるべし式に
山城國愛宕郡賀茂別雷神社とあれば又は若雷とも式にあ
り土雷は舒明紀に九年二月大星従東流西便有音似雷時
人曰流星之音亦曰地雷云々見えたり鳴雷は式に主水司
坐鳴雷神社等見えたり伏雷此名他に見えざるを記傳
にいへり土雷とあるは大地になりひゞくいきほひあるをいふ
にや伏雷はその成居しるさまをもて名づけしものなる
べくまた雷氣の伏しこもりて一時に發聲せるところに
よれる名義にやこのみならずいふべし震雷のことと法苑珠林七五号

に雲中の風界と地界と相觸まま風界と水界と相觸ま
また風界と火界と相觸まて雷声が發することたとへば
如樹枝相揩即有火出といひつその鬼神あることかも
あるせり幷字が延佳本に並と作るへ非なり成居とある
へ心してつける文字なりそは一火が燭して見まさる
ところ八種の雷の成居さるまてとはいつこよりいつに
して成出たりといふことともえしりまぬことゆゑに見まし
るまつに成居とつけるなりこの八種の雷へ一切女人の
情相が形にあらはして見せたまへる神業なるぞかしこ
が佛家よりは八識の變作ともいふべし古人の語に外面如

菩薩内心如夜叉と女人のことをいへるぞうべなる記傳に
も甚く怒て死し人などの後に雷になりてむくひをすること
と昔も今も多きは是故ぞといへりこのことと男女ともよ
くおもひこしとむべし

於是伊邪那岐命見畏而逃還之時。其妹伊邪那美命言令見辱吾。即遣豫母都志許賣。此六字以音令追。爾伊邪那岐命取黒御鬘投棄。乃生蒲子。是摭食之間。逃行。猶追。亦刺其右御美豆良之湯津津間櫛引闕而投棄。乃生笋。是拔食之間。逃行。且後者。於其八雷神副千五百之黄泉軍令追。爾拔所御佩之十拳劒而於後手布伎都都。此四字以音逃來。猶追到黄泉比良。此二字以音坂之坂本時。取在其坂本桃子三箇待擊者。悉逃返也。爾伊邪那岐命告桃子。汝如助吾。於葦原中國所有宇都志伎。此四字以音青人草之落苦瀬而患惚時。可助告。賜名号意富加牟豆美命。自意至美以音

記傳六十六見畏等とは女神の御ありさまこの雷神の成居
たるをも男神の見まして畏く逃還むとおぼし殿戸より逃

出たまひしをなをりといふことあり逃(ニゲ)の‖ニは毛麁(ケノアラモノ)毛柔(ケノニコモノ)ま
さ荒魂(アラミタマ)和魂(ニギミタマ)まさ食物(ヲシモノ)が火(ヒ)もて煮(ニ)るなどいふ‖ニといふ言とぞ
の義同じ詞にて男神の火神が斬まして妹命が追ひ來ま
したる妹背のいとつよくこはき御心のほどにおもひきや
おもひもよらぬ妹命の御いかりさまにましつるが見まし
あこがれ來ましつるつよきその御心もとみにをきてた
よるくやすらぎのしこくまして殿戸より逃還むとする
まふゆゑに‖ニゲといへるにてその‖ケは毛の身より生出(オヒイヅ)る
が如く何(ナニ)にても内より外に出るがいふをりの言なり‖ニ
‖ゲといふ詞のむねこまかにおもふべく知るべし一切の女人

たちてのこころれ神業がよくおもひ見ませいこのようつ
くしき色香が身にもてりともこの祇王がうたふ　もえ
出るもかるゝもおなじ野べの草いづれか秋にあはでは
つべきとあるが如くつひには女神の如きこのくちがある
そして男の為にすてらるゝがこの下界のおのづからな
ることなりなればたれもかれもおのが身の色香がたの
みにまもる凡情がさしおきてひさぶるにかやうしこねの
神意がもて夫につかへたむべりてはしとせの後にはこの
なりぞ天津御國に生まて常世に色香めぐさき神の身が
得そべり此界にてちぎりがこめし夫がも天上にむかひ

とりまそこの國に生ミのこしおきたる子どもらのゆく
末の立榮むことをながく見むと真心にこひのむべし是
ぞ欲界の凡情に即して第一義天の神徳を成辨せしむる
我皇國の御神業なりこを佛經の中には應以長者居士宰
官婆羅門婦女身得度者即現婦女身而為説法應以童男童
女身得度者即現童男童女身而為説法等と説りかしこく
も二命の天降まして國を産ミ神を生ミ黄泉國まで實に
いでましさまぐの神業を以て蒼生を神域に誘引志たま
ふも皆是我等如き凡人に廣大なる神徳を成辨せしめむ
とおぼしたまふ大慈大悲の御神意なるぞかしまことく

の神業のことを女子の為にいまひとついはゞ女たるものの
はあやにしらねの神意を常にもちはべりて男の為に身
を伊豆能賣（イツノメ）神の如くおぼそこにつゝしむべきものぞとふ
ことゝより示したまへる神業なりそはいこのまとひふに
女神の殿戸にこのへり入ましてもなに御心にたゆみなく
つかへてまさべ男神の為にいとおさましき御ありさま
を見このしこまることもなこのましを風とおとさり
くいをやまく御ねませしゆゑにこそ男神の為にまそてら
れまたことましもなりていよく御いこのりをおこし人草
をくびりころさんとまでのことゝへなりぬるなれこのこ

と世の中なる夫婦のなからはかまてかることにてさるか
さましきことゝなりぬるも男女ともに真心がもとの
さみに事業がねもごろにつゝしまぬかやまちぞといふこと
が二命の御業もてをしへさとしおのれよるにまんかり
なるたよりき女のふかくかくせるこゝろ男のかなかち
にこそ見るもよからぬわざぞといふことがもなべての男
子にをしへましゝる神意もかりぬべし源氏帚木巻にさ
まぐの人のうへどもがのこりかなせつゝおやのこの世に
つけくみるにはとがなきもわがものとうちなのむべき
がかゝるなむにおやのある中にもえなん思ひさだむまじの

りなるをのこのおやゝけはつかふまつりなかぐしき世
のつくえなるべきもまことのうつなものとなるべきが
とりいでさんにつこのるべししかしされどこのしこしとて
もひとりふたり世中がまつりごちしるべきならねばこの
そはしもまたまけられしもつのみにならびきてこそひろき
にゆづらふらむせまき家の内のかるじとまぺき人ひと
りが思ひめぐらまをまたらちであしかるべき大事どもな
んつらぐおやのあるとかきばつらりかふさきるさまくなの
めにさくもありぬべき人のよくなきがまきぐしき心の
をさびにく人のかりさまがあまたみかなせんのこの

なりねどひとへにおもひさだむべきにあるべしとぞなりけり
におなじくは我ちからいりおしなかしひきつくろふべ
きところなく心にかなふやうもやとかりそめつる人の
さだまりのごときなるべしのなかむなしもてがあるふにの
なえねど見そめつる契なのりがもそでごとく思ひとまる
人は物まえやのなりと見にさせてたもとをしる女のさえも
心まくおしくらるしなりされどなまの世のありさ
まがえたまへあつむるまにまに心におよびなむいとゆかし
きこともなしや君ぶちのことなき御かしびにはましく
いのなかりの人のはたぐひたまなむと志のぐいひく今

はたゞ志なにもまうじのさちをばさらにもいえじやくく
ちをしくねぢけがましきおやかぶはなくばたゞひとへに
ものまえやのに志づのなる心のあにむきなくんにるべ
をぞつひのこのえどころには思ひおくべかりぬるといへ
りなかこしの御神業はつきいかまかしのることしもお
かのれどふるきかしこみ　思ふこといかでぞたゞにやえぬ
べき我えひとしき人しなかれば言令見辱吾とかば（アヲミハヅカシメタマヒツトノタマヒテ）とよむべしとはさきに莫視我と
ことあまりあつのせつるがきしまふで見ましつるゆゑふ女神
のありさまはしき御身のさまが見られましつるがいとくそ

ぢにのりましてのくのさまへるなりさきには白とかき
こゝには言とかける筆つかひもことに妙なり豫母都志許賣
は書紀に泉津醜女此云志許賣一云泉津日
狹女とかけり私記に或説黄泉之鬼也と云り名義は形のお
そろしく見悪きをいへるにて俗に志こつらなどいふ意
なるべし鬼をオニといへるは面丹の義なり黒御鬘との加豆
良とふものはすべて二の品あり葛と鬘と髪となり葛は
葛かづら五味忍冬など凡て蔓草のことなり鬘は頭の飾
に懸る物なり髪は和名抄に和名加都良釋名云鬟少者所
以被助其髪也と有て俗に加毛自と云物なりのくさまぐ

なれども本は一より轉ぜる名にて草の葛より出たり鬘
は上代には女男ともに懸る物にて蔓草を用ひしことは
石屋戸の段に真拆をかけしを始て日影鬘など又必しも
蔓ならねど花鬘菖蒲鬘柳鬘木綿鬘などあり又絲などを
以ても作りしにや珠をかざること天照大御神の御飾に
見えたり玉鬘と云は是なり穴穂宮の段に押木之玉縵と云
も有て貴き寶なりしと見ゆ萬葉に波禰縵と云ことも
ありと記傳にのべり花鬘玉鬘は天人の頭を飾る物なり
密教をまなべる者はよくしれり今こゝにいふ御鬘は
黒き色なる玉鬘にてそのさま蒲萄葛に似たるなるべし

ゆゑに蒲子となれるにこそ蒲子書紀には蒲萄とあり和
名鈔に紫葛和名衣比加豆良蒲萄和名衣比加豆良乃美と
あり鬚ありて蝦に似る蔓草ゆゑなりと或人いへり摭は
字書に拾也とも取也とも注せり前に左之美豆良とあり
こゝに右とあるをもておもふに神世には女男とも櫛を
刺したるものゝごとく男は左右にさゝせりと見えたり笋は字
鏡に筍笋太加牟奈とあり名の意は竹芽菜なり櫛の歯の
状竹子の並立るに似たり書紀に塩土老翁が玄櫛を投し
つは五百箇竹林になりしとあるも此たぐひなりさて櫛
鬘を投棄まして蒲子笋となしたまふは鬼趣のなへに福

徳なきものは常に食物にともしく去て飢たゆるものゝ
ゑ食物をあたへそをひりえむひまなくとかくまげのびま
さんとそこのりましゝるなりこゝらは佛經に鬼趣のさま
をとくると全く同じ鬼趣は食物を得ることは至りて難
かれどこを得ればそを自在に多くなして一時の飢を去
のぐことゝ人の火を得て自在にきそるとひとしといへり果
報に優劣のたぐひあるは六道の中鬼趣にもきたるはな
きなり纂疏上六に凡物化有四義一有氣成有氣如田鼠化
為鴽腐草化為螢之類此天之所為也二有氣成無氣如斬木
為器殺鳥為羮之類此人之所為也三無氣成無氣如縩麻為

布帛之類示人之所為也四無氣成有氣如黒髪為蒲萄爪櫛為筍之類此神之所為也蓋不測之妙用所以越乎天人之道也問如彼幻術結巾為馬之類亦神耶曰彼假相也此眞實也曰醜女採啖故也と見れば黒髪とゆふへいふは神通と幻術とのわかちを知らむとありせん人は天台の玄義なる神通妙の解釋を見るべきなり我神典のたふときことをおのづから大悟することあるべし恥といふ言の意をいはゞひえつくせる事なども知られるなり八とえづる心の發するまゝに身内の血のうごきありて顔の色にあらはるゝものにて思と血と火とは同而不同不同而同なるものゆゑ身もあつくなりておもてにでりきるものなりこはいさくえらぶちたるをりもしるものなりこをもてハヂといふ言の形音義を知るべし千五百はたゞ多きを大方に云言なり凡て其多さのほどに從て八とも五十とも八十とも百八十とも五百八百とも千とも千五百とも八千とも萬とも八十萬とも八百萬とも千萬とも云りさて百を冨と云は毛々の轉れるなり毛と冨と通へり但しこれ五百に限れり餘は幾毛々と云り数の名は一二三四五六七八九十百千萬まてその二はヒ行のヒなるをしめまくその十はト行のトなるとまりゆゑ十をツとももまたタリと

もいへり百はマ行のモにて物がまとめたる数の名は十より多く千はタ行のチにて物のこまかにちらかれたる数の名は百より多く萬はヤ行のヨにて百千萬と諸の物のよりつどへるが志かいへば千よりも多きを讀かぞふる数名なり黄泉軍は鬼趣の者がして追しめたまふをいふなり記傳に軍は軍士が云稱なり萬葉二十四に御軍士手とよめり戰が伊久佐と云ることはいと後のことなり然るに伊久佐は射合箭と云ことなりと師のいはれつるはいかゞ。といへるもさることなれど射合箭が以て軍士がいへる古語と見るときはともにとぶなきのるべしなほこのごとくに

は古人の説も志かくあるなりタヽカヒといふ言は手に打物がとりてかゞみは打合ことなり於後手布伎都々とは書紀に背揮此云志理幣提爾布屢とあると同じことにてフクもフキもとらは御劔がとりたまふ御手が後ざまに囲して打振々々鬼趣の追來るがおどしさけつゝつげのびませるさまがいへるなり手巾もて物がふくさまがもてフキフクとフリフルと同義なることが志るべし都々は尓なり此を為ながら彼がも為るが云辞なり且且の約まりさる歟と記傳にいへりこはフキツフキツといふことなり黄泉比良坂とは黄泉と顯國との堺なる坂がいふなり書紀に

平坂とあるが如く平易なる意なるべし桃子三箇とは記傳に桃之實子三取之師の訓によるぞよき三子と云は漢文讀なりさて師云蒲子桃子などが投あるへたまひしは後世の道饗祭の本なり彼祝詞に根國底國與利麁備疎備來物爾云々といへり漢文讀にはさべきところをば主とよむべく和文讀にはさべきところは和文讀にはさべしいづれにても本文の義意が讀あやまらざるがもてよしとすべし蒲子等は投あるさへませし食物ゆゑに道饗祭の本ともいふべし桃子は鬼が避る為にこれが投撃たまふなり故待撃者悉逃返也とあり記傳にこのよしなく師説があげらるはあやまりなるべし纂疏上二百廿号に用桃避鬼者荊楚歳時記曰桃樹東南枝三尺八寸向日鬼憎去之避疫術也尚書暦曰三月上卯日取東桃懸戸上鬼不入陶隱居云凡毎月十五日取東行桃煮沐浴辟温病とあり佛家にても餓鬼は桃木がいえさくるゆゑに食物が施むとありせば桃木のやとりがさけて施まべしといへり鬼の人の唾が畏忌むことは法苑珠林十六号に見えたり穢き物が見さるをり唾がえくとそれにてこみに心の清まるものなりこれまさ速玉之男の神業なり纂疏に拔劔背揮者謂以智劔却邪也とあるは台家の観心釋の如き注解なりとうに十拳劔が

以て黄泉軍がうちそこひたまふとあるは正しき事實の
神業なりこのことあきらかにわきまふる人まれなりよくあきら
むべし逃返が舊印本には坂返に作り告桃子をば モヽニ
ツゲタマハクと訓べし此をも實と云むは拙しと記傳にい
へれど桃子もて黄泉軍が打去ぞけたまへるゆゑ桃子に
正しく打向て告げたまへる實事のまことはあるべし文な
れは文字の如くよむがうへにて言意並朴なる上古の正實
がうしなはむとして記主の意にうたがふべくやあらんさしべ
子をば ミ とよみ告をば ツゲ とよむべし桃子は鬼がさく
る徳が持まで無情の物すらなべきことに心づけて次が持

る徳用がもて吾が助しが如く人草が助よくこゝろさしは
のたまひつぐる神言ゆゑたゞ ノリタマハク と訓むより文字
の如く ツゲタマハク と訓むべし人は物がたゞ言(イ)ふといひ
告るとそこはいさゝかけじめありて言と告と文字がある
しまけおこのれさるがことまことにはあきらむべし無情の桃へ有
情の人に物いふが如く告(ツゲ)たまへることはといふなる人しも
あそれど色心不二の妙理がきへ悉くおなじきを大神な
るがゆゑにあこつげたまふなりとは佛家にていへば如來
の内證とやことのに法師原のいふところなるゝの色心不
二依正一如悉有佛性草木成佛のことでありなれどまがの大

神は釋尊の天竺にいでまさぬさきにはやくもこのことと
まりがはやくさまに神業がもて示しおかれたりしが
もて御神まさ人のいのちがものしたる画像木像ハいふま
でもなきことにて直にいるは鏡玉剱または石にまれ木
にまれ神實（カムザネ）とあがめ奉ればすなはち神となりましてい
とくしき神徳がほどこしたまへりとのふかきむねがえ
知らでは我神典がよみても真心に尊信することはかた
くこそあらめさてには石をさへ神と知りてをろがみ奉る
まで神教のまことがまことに信知しうるひとなるべき外
國の教法にて偶像が拜せるとて我神典佛教等がいやしけ

りてらふこそかへりてかくいさきまでをこりしかる
ことなれと知るべし石地藏尊がをろがむ僧侶がことなる
道反大神がいふかりてらふは高天原が信ずる神官の極樂
國がてらふとひとしき凡情の小見なり助くといふことは力
なき人のくるしめるが見て外よりそこへきちもそへて力
がそへることなりそのむね（タスケ）といふ三言の義が考て
知るべし如くといふ言が御國にはかしられざれる詞はな
きゆゑには後世の詞なりといへる人もあれどそハたがへり
直に（ゴトク）何といふへゆとよりなきことなれど（ゴトク）といふ言
は何々（ノゴトク）といひて必ずさにつく詞なるが故にゆと

よりなりし古言なりよくこゝろみるべし葦原ノ中ツ國は天ツ國と根ノ國との中間なる國といふ名義にてはなしこは宇麻志阿斯訶備比古遲神の御名なる葦草の海中へうまく生ひ志げりたるその葦原の中なる國といふことにてこの名は那岐命のたゞえてことよりいでたまへる國名にて天照大神も石屋に坐てかくのたまへることゞもに見えたりたゞ葦原とのみいへることは神産巣日神また須佐命の御言に見えたり豊葦原之千秋長五百秋之水穂國といふことは大御神の天孫をみよさしたまふをりのたまへる國名なりこのをり高御産巣日神も此葦原中國者とのたまへり

大國主神少名毘古那神と此國を作堅めたまひしなり葦をいよゝうるはしくもしげりもしたまひしなるべしそは大三輪神社の神傳に二命戮力一心殖生蘆葦固造國地故号國造大己貴命因以稱葦原國と見えまた葦原色許男命てふ御名にて志かおもはるゝなり記傳にこの葦原ノ中國といふは西ノ九州をさすと云は高天ノ原を大和ノ國のことゝぞと誤り思ふところより出たる強説(シヒゴト)なりといへるはまことに志かり此悪論をなすもの今もまゝあり記傳に所有は阿良由流(アラユル)と訓べし伊波由流(イハユル)と同格の言にして共に古言なりといへりその所有の語ハ中ツ國ニ成出てまでニありとあるところの人草のこ

なりてさらに生出るなどの人草までをかねたる語と見るべし記
傳に宇都志伎青人草書紀に顯見蒼生此云宇都志枳阿烏
比等久佐とありて私記に顯見者見在之義也とありかゝ
れば宇都は現志伎は嬉悲の類の志伎にて辞なりさて人
草のことは如此詔ふは書紀大穴牟遲命の御言に吾所治
顯露事者皇孫當治吾將退治幽事云々かく幽神事に對て
顯露事と云るが如く目には見えず顯ならぬ神に對て顯な
る世人と云ことぞ青人草と云所以は次の文に千人死千
五百人生とある意にて草の彌益々に生茂なびこるに譬
たる稱なり青としも云るに心を着べしといへり神孫な

らぬ凡人のはじめは上にもいへる如く十方世界より神業
にひかれて成出生來れるものにしてこは人にまれ魚に
まれ鳥にまれ虫にまれ我御神とふかき縁にしあればこ
そ生も來るものなれと知るべきなり人を草としもいへる
心は野邊なる千草といふものはそのはじめ人ありてこと
さらに種をまけるにもあらざれどくしびなる神業によ
りておのづから生ひそへしつひにしげりなびこ
れるが如くまたその生初たる種をとみに見てさせばたゞ
一様の青草に見ゆれどその種類千萬にわかれて種々な
るが如く世人も一様に人とは見ゆれどその貴賤貧福利

鈍智愚等千萬にすぐれたるものにて八千草の春はもえいで夏はおひしげり秋は花さき匂ふこそ見るまにはやく冬がれすたるにひとしきものゆゑ青人草とも大神ののりたまひそめしなるべしけだし草のかれやすきをもて人の身のはかなきをおどろかしたまふのみならず人の心のかはりやすきをもさとしたまふ神意なるべしそは中巻に宇都志岐(ウツシキ)青人草(アヲヒトクサ)習乎(ナラヘヤ)不償其物(ソノモノツクノハズ)とある神の御詞にて志かおもへるしなり大凡物の生るゝに胎卵濕化の四種ありて世界のはじめには萬物ともに大かた化生なりときけり宇都志岐といふ言の意は幽玄なる神の御身とたがひて凡人の身は凡眼の前に儼然と顯して見ゆるものゆゑに志かいへるにてそのウツは宇豆乃幣帛(ウヅノミテクラ)などのウヅの義にして鏡に像がうつしうつをいふそのウツシといふ言まさウツクシキといふ義にて物のきはやかに見ゆるをいふ詞なること此下に宇都志日金拆命とある宇都志日といふ言にてさとるべし人といふ言のヒトは獨一の義なりそは我神孫ならぬ凡人の大もとは佛天人阿修羅等の造作したるものにてもなくまた神々の私に創造したるものにてもなくまた神々の私に産成するにてもなしこはみな天然法爾として各々ひとり〲の業因にひかれて十方の世

界よりこのくみにその有縁の國中へひとりして成出生來るものゆゑにこを青人草といへば其ヒトてふ言の意はすなはち獨一の義なることを知るべきなりけらしこのうる人草の魂をしもことさら我神國へ成出生來らしむるは天神諸の大命をうけまして御國をこのくの如く生成たまへる二命の大神をはじめそがなかの天神地祇の大慈大悲の御力にしてすなはちこれ神國に生まれしえていともさかしき神域はいざなひ廣大不可思議の神德が一切の人草にさかしまで證得さることを得せ令むといとねんごろにおもふがしたまふ御神業なるぞかしこのことを上にも

いへるが如く阿彌陀が浄土が物して十方の衆生をいざなふとすゝく同じ大悲のこととありまして其實は阿彌陀が浄土が物せしも釋迦が八萬の法藏が開きたるもせむずるところは諸佛救世者住於大神通為悦衆生故現無量神力と妙經に說るが如く一切衆生に大神通が證得せしめんが為にて其大神通といふは即是我天照大御神の大日至妙の大神通にしてかしこくも人草が至妙の神域に誘引きたまふ御神德なるぞこのむねがよく真心におもひ知らば我は沙門釋子なりといひて我神明がうろしめ奉るおそゝざなむかりそめにもなかるべし若しからば此沙門は

外道なるべし八宗九宗の祖師先徳の中に我神明を尊信せざるもの一人もなきがゆゑなりきまことに神明を尊信せる白衣の君子なりしがよし儒佛の教理を信知せずとも天孫御代々の御ゆるしになりてあるところの教法を私にあざけりきらふことをばなすべからずこはたゞ儒佛のみにあらずすべての學業みなこれ利國利生の為にとて諸人はまなべし先たまふところのものなりかのきこのましからねばとて他人のこのめる學業をいみきらへるは至愚のしわざなりけらし天朝より御ゆるしになれる學業におきて全く利益なきものはあらじたゞそれま

ねぶものゝ心の善悪によりて國害とも國益ともなるなればその教法をばにくむべからずその心あしき教師学徒をばいつもよくたゞすべくやあらんこれとても其職掌なればこそなれ他人の可否をいたさざるやいふにまをさる。かのしざは神の御業はたがひなきがひとの心はさもあらばあれさて人の『ヒ』とふ言には日火の義彼此の彼の義まさ思ひ思ふといふその匕の義等ありと知るべくまた『ト』とふ言には利鈍の利の義また止の義戸の義等ありとおもふべし御國の詞は義意多含なるが故なり佛家にては人道のことを四教儀に五人道四洲不同謂東

弗婆提壽二百五十歳南閻浮提壽一百歳西瞿耶尼壽五百歳北欝單越壽一千歳命無中夭聖人不出其中即八難之一皆苦樂相間在因之時行五常五戒五常者仁義禮智信五戒者不殺不盗不邪婬不妄語不飲酒行中品十善感此道身とあり同集註上六十三に輔行之二上廿六云梵語摩㝹闍此云意人中所作皆先意思易曰唯人為萬物之靈禮云人者天地之心五行之端此亦未知五道故也婆沙云五道多慢莫過於人又云五道中能息意者亦莫過人又法苑云人者忍也於世違順人能安忍とみえたり此等をもて人の大凡を知るべし御國人のいふときはたとへ智愚貴賤をいはず皆是神業にたすけられてことごとくに生きいづるも

のなるうへにきらけく神孫といふことのしるきぬ凡人の子孫にても天地と立分きて御國の成立る神世より今日に至るまでに數萬歳を經ることとしるべきば何れの時世にありてつきえめて神孫なる人と夫婦となりぬることありしなるべければみな神孫なりと通じていはんも可なるほどのことゝなりよしさなくとも二命の生成たまひし神國に成出る神民なりこの故に萬國の人よりもことなるところありと知りてよくこのことをわきまへて神勅をのしことく皇朝を尊信し奉るべきなりまた神といふ言人といふ言はともに通別の二義あ

る名稱なることかもありあへべし我神典なる天神は佛經なる諸天善神にあたれりその天道といふは欲界に六天ありそは四天王と忉利天と夜摩天と兜率天と化樂天と他化自在天となり倶舍頌に六受欲交抱執手笑視婬初如五至十色圓滿有衣といへり色界は十八天ありそは初禪に梵衆梵輔大梵の三天二禪に少光無量光光音の三天三禪に少淨無量淨徧淨の三天四禪は無雲福生廣果無想無煩無熱善見善現色究竟との九天なり無色界は四天あり空處識處無所有處非非想なり即三界とりすべて二十八天あり倶舍頌に四大洲日月蘇迷盧欲天梵世各一千名一小千界此小千千倍説名一中千此千倍大千皆同一成壞業道增壽減至十三災現刀疾飢如次七日月年止三災火水風上三定為頂如次內災等四無不動故然彼器非常情倶生滅故要七火一水七水火後風と見えたりこの三禪天まではは依報と正報とことにしてその成壞すること異時なれど四禪天は依報と正報と倶時に生滅するものぞといふことをよく知らざれば世界の成住壞空のことわりにいぶかしきところあるがゆゑに我神典のことわりにおきてもいぶかしきところありて心よくときがたししかるにこのむねを知らば神典佛經ともにときやすきのみなり

むぞのこゝみに明證となりて其信がとることもともつよし
ゆゑにことをこてにかげおくなりけらし我神典なる天地
の成立が第三禪天以下のことくし造化の參神があるは
無色の四天までは色界の第四禪天に坐して天地の成立
なすべき時運が神なりり彼天よりたゞちに高天原へ来たり
生て成ゆゝそれましゝるおもむきに此記が講説せるも
神意多含の一説なるべかれどなほこれ淺略門にして我
神典の深秘釋にては、なそのるべし又至妙のむねあることな
我神典參神の造化は無為にして有為の神徳がかゝらし
二靈の作業は有為にして無為の神理が志えしたまへり

又至妙のむねあることな我神典理具事造一念三千の妙旨
が以てこがおもふべし云々 記傳に苦瀬は久留志伎勢(クルシキヤ)と
訓むも然(サル)ることなれどなほ師の宇伎勢(ウキヤ)と訓をとるぞよき
勢(ヤ)てふ言は逢勢(アフヤ)渡勢(ワタルヤ)など時と處と縦横(タテヨコ)に用(ツカ)ふなり此の
苦瀬(ウキヤ)は苦患(ウキ)ことに當(アタ)きるが云く縦横にすゝれりといへ
り落苦瀬而とは憂事のよれるところにおちいりてそが
のがれいでがたきが指てセといふなり ウキのウは多種
逼迫声なる音なるべくそのキは逼迫せられていづるこ
ゑなるべし クルシムといふ言は心にこのまぬ事の身にまつ
くりつくが物うくおもふがいふ詞なり患愡の愡が惣と

もなとも作るはみな非なり一本又舊事紀には忄に从るぞ
よき火遠理命の段に惚苦とあるも同じ彼も此も久留志
牟と訓べし字書に患禍也疾也惚恫不得志也と注せり可
助は記傳に上の如助吾が此へつけて見べし今吾が助し
が如くに可助と云ことなりといへり意富加牟豆美命は
大神之實なりと谷川氏云りさもあるべし此号は奇功が
美てつく神とは稱へ賜ひしのみと見るはひとわたりの
見つくなりと知るべきなり御國にていさをあるものへ
名が賜ふて其徳が稱誉せることは上代よりのならはし
なることにて知るべし中巻に賜名号櫛根津日子と
あるは有情のものへ名がたまひつるにてこそは非情の
ものへ名がたびさるなり谷川氏のいふところよろしか
れど之といふが津といたまひし豆と濁音によめるは加
牟とたぬるゆゑなり告へ語也啓也報也命也示也と字典
に見えたり此名にても告桃子をば文字の如く桃の子に
とよむべきことがあらふべきなり

最後其妹伊邪那美命身自追來焉。爾千引石引塞其黃泉比良坂。其石置中。各對立而。度事戸之時。伊邪那美命言。愛我那勢命。爲如此者。汝國之人草。一日絞殺千頭。爾伊邪

那岐命詔愛我那邇妹命汝爲然者吾一日立千五百産屋是以一日必千人死一日必千五百人生也故号其伊邪那美命謂黄泉津大神亦云以其追斯伎斯此三字以音而號道敷大神亦所塞其黄泉坂之石者號道反大神亦謂塞坐黄泉戸大神故其所謂黄泉比良坂者今謂出雲國之伊賦夜坂也。

最後とハ初に志許賣次に雷神に千五百の軍が副へておハしまさるところ桃の子の爲に悉く逃返しけるゆゑ最後に女神の身自追來ませしなり焉の字は黄泉比良坂之坂本がさせるなり爾をばシカルニと訓べし千引石とは書紀に千人所引磐石といへるが如く大石が引塞たまふがためといふなり萬葉四五十に吾戀者千引乃石乎七許頸二將繫母云々とあるも見えたり引塞は大石が引出て追来まさる坂路がふさぎ女神がさへたまふなり佐閇は令障なり其石置中各對立而度事戸之時といへるこの千引石とふことに心がつくべし世間の男女のこゝみにちぎりぬる中がおもひたくでえのなそぬことありて志だしはさちまのれても古人の句に 蜻蛉やとびながらしてもとの枝とあるが

如くおやくはまことぞりにあひ見るものにてこそある
男神の如くをゝしく貪愛の私情がらへことはいさゝかも
のまざりける　めぐりあひし天の御柱それなりて神の
心のうるはしはぞうき度事戸は書紀に建絶妻之誓と書て
絶妻之誓此云許等度とあり私記に曰按古事記曰度事戸矣
故今尋彼文而讀之度者猶如言度云々　さて書紀に書ける
る文字にて大意は聞ゆれども許登度てふ言の意は詳
ならぬぞ故按に其誓の辞を指て云ゞそは書紀一書に盟之
曰族離又曰不負於族云々　これ即事戸の御辞にやさて次
に次掃之神号泉津事解之男とある如思ふに事戸は事解

言の約りし語にもや有むと記傳にいへり族離とのたま
ふ是即事戸の御辞なり事は御柱をめぐりて夫婦となり
たまへる交事にて戸はその妹背の中を絶ちて永く離る
ゝをいふなり家の戸も内外を絶隔て他人のゆきかふことを
をとゞむる為のものゆゑにトといふなり今の千引
石も即家の戸の如きものなりトてふ言は断結のこゝろな
る多行のそてなるにてそのむねを志るべきなり為如此
者とは石を引塞て事戸を度したまふをいふなりさて族離
むとのたまふ御辞のこゝろなるぞ石を引塞まさが即その證
しなればなりこはいさゝかてもなほ一つのこゝろみに愛

とのふまふれ禮が失ひたまへざる御辭ありてその御詞
の心はあかの也はひろぶるは愛とのことあかひそへるが我
那勢命いとしのあかふところおもひきやあかひこのはり
ましてあくもつ也なきことがのさまひてこのくもなきけ
なきことがなりたまはゞよしいまより汝國之人草一日
絞殺千頭と言きといふ文の意なり記傳はことの言の字
が上とひとしく白の意は見てマヲシと訓るはそろしと
はノタマハクとよむべし汝國といふにても女神の御心は
いかりがふくみてゐやまひまさぬ御辭なることは志る
ことなり記傳は汝國とは此顯國がさすなり抑御親

生成給る國をしからく他げに詔ふ生死の隔りが思へは
甚も悲哀き御言にざりそる千人と云べきが千頭と詔ふ
は絞につきさる言なり同じことが次には千人死と云る
に合せて思ふべし絞は字鏡に縊絞也久比留とあり頸が
志めて殺をが云といへり男神の加具土神が斬殺女神の
人草が絞殺は男女の真情なる貪瞋痴の至極が何らそらし
たまへる御神業にてこれ一切在迷の凡人がふかくいま
しめたまふ為にとてこそかゝる神業が故になしたまふ
なれとひろぶるに尊信すべし佛家にては之が為實施權
の神業といふなり其意は在迷の男女は　白玉ゟ何ぞと

人のとひしとき露とこたへてきえなましものをと古歌にあるがごとくおのが命をさへをしまぬいこのうちなりゆゑにことなる二命の如きわざが實になきを凡人もかるなればそをいましめたまふ為にとてこそ權にかゝる神業を施したまふなれ天神諸の大命をかゞふりて大御國をかくの如くものしたまへる二命の大神とあがめられまを那岐那美大神あるに在迷の男女の如く實に色欲にまよひてかゝるわざをなしたまふといふことやはあらんやこはまさしく凡人がしてかゝるつたなきわざをいとひまそくしいともめでたき神域にまゐるのぞらんことをこひのぞよとさとしたまふが為なる神いざなひの御業なりと一切の男女たちふかく覚知したまへ外國人はこのむねをしらで我神典をよくことり日本の神といふものはいとのまもあさましきわざをなせしなどいたくあざけりつらふときけりこのことまことならばゆゝしきあやまりなりけらし神業の内證をしらざるがゆゑにこそあらふなれかゝる神業の内證を説き顯さばいはゆる妙法蓮華開權顯實の大法門といふものなり為實施權開權顯實といふ名は佛家にいふもそ其義は諸道にあまりてそなはることなり書紀に始為族悲及思哀者是吾之怯矣等としるく見え

まづ此記に吾者到於伊那志許米志許米岐穢國而在祁理
等と見えまづ那美命が黄泉津大神とまをすが如きをこ
まこのにこのくにへ見よ地藏大士がことさらに閻王となり
て𨺚獄の罪人が救ひたまふと其御神業の大慈大悲にま
まことすり全く同じかるべし天忍穗耳尊の不須也頗傾
山目之國歟とのたまひし此國へかしこくも大御神の天
孫が天降したまふもせんするところ人草がいざなひを
くだせたまふ神業にて那美命の黄泉へいそぐ坐て彼鬼趣
のものがさかしき神域にいざなひたまふと同じことゝ
りなりされば神業へ神業につきて權實も本迹もあるな

りそれかの大物主神は本なり實なり丹塗矢(ニヌリヤ)と化(ナリ)まして麗(ウルハシキ)
壯夫(ヲトコ)と成(ナリ)たまふは權なり迹なるがもてもさとるべしを
でにまゐるがただ神佛のことが以て本迹がいひ權實がい
ふはいまだ真の佛法をも真の神道がもしらでただその
のさちにのくなづける者のわけつりひにて其實はこが
いふ佛学者もこがいかる神学者も五十歩百歩の論なる
べし佛身が以て得度すべきものゝ為には佛身が
現すべくまづ佛陀もまづ神身が以て得度すべきものゝ
為には神身が示すべし我大神あに佛陀の内證外用が知
らざらんやそでにこが知たまふがゆゑにこそ黄泉國にい

りまして大神となりてこの鬼趣が利益しまします高天原へ
御子があつくりあげまして世界が照臨せしめたまふなき
かゝる神変不思議の化導がたゞ佛陀の垂迹とのみあるも
へるはいまだ真の佛とふもの真の神とふものはいかなる
るものはまたぞとふことがえしらざるまことそさて男神
は御子が殺きをは其形があらはし女神は人草が殺きをは
其形が見せざるもことゝまりあることにて女神の直は男神
へうらみがむくひまさでかへりて男神の愛重志られまふ
ところなる人草が絞殺して男神へうらみがむくひまをも
ことらこれみな女人の情体が示したまふ神業なり世間

の人々こての神業にて男女の情体がよくさとりかくる
ことのなかんことが夫婦かみまことひのくませ二世
も三世もとためしがかける男は離縁せられていさく
うらめる女人の内心は大方こてなる女神の如くはことそ
かくえ男神の我をな視たまひそといへるが入見ましさ
るもまろくまさ女神のかやかしこねの用意があこさり
ましてきさなきくかさちが見られたるもてろしとまる
べし愛我那邇妹命汝為然者吾一日立千五百産屋とある
は女神の千頭が絞殺むと悪誓がなしたまふはよりかへ
りてそがさめは男神も千五百の産屋が立まえむ族は負

じと廣大なる神誓の善願をおこしたまへるまでこれかの阿闍世王が提婆達多のをしへにしたかひ父王頻婆娑羅を幽閉して死せしめむとたくまるにより韋提希夫人のいたく欣厭の菩提心を起しそれよりして浄土の法門のひらけたると全く同じことわりなりそは天台の観経疏に如此等事皆是大士善権現化行於非道通達佛道衆生根性不同入道有異一逆一順弘道益物示行無間而無悩恚闍王現逆為息悪人令不起逆とあるにてさとるべしけだしかの闍王の事は佛道のこととなれば佛理にてそのむねをとくべくこの二命の神誓は神業なれば神理によりて

そのむねをとくべしその神理も我皇國の神理を以てとくべし外國の神理神道を以てとくべきはえてひがことゝなるべし云々つぎ〳〵にかしこかれど天照大神と須佐命と善悪の神性ことにましてしかも姉弟に坐ことのいふかりをいたく韋提希夫人の佛世尊に向ひて世尊我宿何罪生此悪子世尊復有何等因縁與提婆達多共為眷属唯願世尊為我廣説無憂悩處我當往生不楽閻浮提濁悪世也と末代の衆生の為にいふかりをおこしゝを以て因縁因果のことわりと大権利生の御しわざとを凡人にさとらしめさるおもむきをこまかにおもひ見よ我神典上におきて

いぶかるべきところなくいよゝ尊重の信念をますべし
これ即(チ)佛經を以て神典の深旨を助顯し奉るところにし
ていはゆる枝葉花實を以て根抵をあらはその神業なり
此日本心を以て儒をとけば儒即(チ)神道なり此旨を以て佛
をとかば佛即(チ)神道なりまではしかるを儒をとくものは
神理を儒に皈せ令むとし佛をとくものは神徳を佛に皈
せ令むことをあましうきさなき情欲を以て我神典を講じ
て可ならんやこは儒佛二道のくたかむ諸道の学者たち
のかさみにふかく心をすべきことなりけらし神典を講ぞ
るものゝ中に儒釋等をまじへて外國よりまゐるこし学業をそ

なかぶかたきの如くにくむも心せばきわざなるべし儒
士僧徒らのかしかるを見もしきしもせばそをよきにい
ひなほしたまふてこそ神直日の御教をかしこむ君子と
もいそめ天照須佐那岐那美皆是(ナ)大神現(シ)逆(ヲ)現(シ)順(ヲ)利(ニ)益(シ)蒼生(ヲ)
と真心に信知すべきなりまづ書紀に是時天地相去(ルヽ)未(タ)遠(カラ)
とあるが如き観經に阿彌陀佛去(ルヿ)此不(レ)遠(カラ)とあるむねをも
て解すべししからざればうたがひをときがたくやあら
ん汝為然者といふ汝の字をば『ナンヂ』とも『ナ』ともよめり
『ナンヂ』は名持といふことにてたゞ『ナ』といふはそなたこなたと自
他をよびかはせりの詞なりそのむね断結多行の末声

なるにて知るべくまた何にてもその物体およびまたつ
為そにつけそへたる名稱がナといへるにても言の心が
知るべし汝がイマシといふは即今目前に在る者が直に指
てよぶ詞にて今とその者に向ひシとその者が指ていふ
なりこがミマシといふには二義ありひとつにはミイマシを
ミマシといへるにてそのミは見なりまた御の義にもとる
るべしふたつにはたゞミマシといへるにてそのミマシのマ
は御體が於保美麻(オホミマ)とまをすマといふ言にてとは打向ひさ
る者の身体が見てミマシといへるにてそのシはそが指さ
る言なり身体のことがマとも山ともいへるにて考べし自

身のことがマロといふも同義なりまた今といふ言の意が
いそへイは射向イの義にてマは眼の義にして間の義な
りこが以てさとるにイマシミマシといふ言の意がもさとるべ
しそのシといふ言の心はサシスセソの義が以て考べし言霊
のくはしきことがらに微妙なるむねや産屋はウムヤなりツム
は常にいひつたへる言なり立(タテ)は立しめてむとのことまをなり
こが那岐命のみづからの人草が産立ることに説ごとまさる
はうつしきは人草がして人草が千五百人(チイホタリ)づゝ日毎に産
ませむとちかひたまふなりこの御誓によりて御國の人
草ハ日に月に年に多くなりまさりゆくがゆゑに天之益

人といへるなり三千大千世界に國かしも多このむゑれど
あまつのやの如き御誓の神力にひ畏れて人草の生れ出る
國なからんやされば小國にして志かも海外なる大國より
もいとすさふときことたとへば人身の首の如き御國ぞ
と知るべきなり是以とは二命の神誓が起したまへる至
妙の因縁が以の故は一日必千人死一日必千五百人生也
と御國人の多く生れ出るふかきいはれがいへるなり女
神の千人づつ絞殺むと誓ひたまふにより男神のひとき
は大勇猛の神誓が起し千五百人づつ生れしめたまふが
如く古今さまざまの教法が世間に流布せるにより我神教

が妄談の如くなさけりいひつのるものもいできたれるに
よりこのへりてそが為に日本心の真心なる御國人もひと
きはいそしみて神魂がくがきとあらうるぞして我神典の
至妙至正の大理が天上天下になまねくなうそるべき時
こそいたりぬべければよしなが神典が習らふ人ありとも
その心まどいぞまことそがまくしともあらもたぞたぐひと
むきに八咫の神鏡に打向ひ奉りて一には御國の為二に
は世界の為に我皇國の神理が大悟せんことがこひのむ
べしもしなが至妙の神理が大悟せば世界に流布せると
ころの教法の邪正善悪はおのづから己心中に明了なる

ことが得べしこのとき枝葉花實のことわりもあらそれ
はべらん上古は產が爲の時一のなどの別屋がものせしこと
ところゞの神語にて知るべしこは一には產織が一のしこそ
二には產がなきことが大に重みしゆゑなるべしこの事
此巻の末に御子が產ませたり產殿が造りたまふところ
のさまも志一のあらそるしなり記傳六二世にさて如此交に
詔ふはたゞ多一のあらむことが云にて必しも千と千五百の一
數に限らむとには非ずといへるハさることなれどこのを
り二命ののたまへる御言は一のなりぞ千と千五百との數
がのたまへるがゆゑに一のく此記には志るせるなりとふこ

とが志るべきなりさての千五百は彼の千秋長五百秋之
水穗國者とのたまへるとへいさゝかことなるぞこの一人の
數がヒトリフタリなどいふそのトリタリハ物がたちに
一のつ多行の声に良行の到がそへたる言なり記傳に死生
のことが生ハ被產なり死は過去なり須岐は志と切る志
奴留ハ過去るなりといへるもさることなれどイキル
といふは息入にてあればシヌルはシイヌルといふ言にてそ
のシはイキシのシにて息風のことなりそのイヌルは徃
るにて秋もいぬめりなどいふと同言にて穀風なる息の
出去て一のへたぬがシイヌルといふなり生はウマレウマ

ルすなはちウマンウミウムウメととなへられける詞にてそのウ
マの約なるゆゑ御子の生まるる時アレマセリなどいふも
いへりこれありそれより思ふことなり天然自爾たる形音
義の至妙なることがひとつひとつ小児は大小便がなさ
しそんとするとき母がシシといへば小水が出ウム
といへば大便がなるそのものなり子が産むも[梵字]字の妙用
なり密家にて梵天[梵字]字が説き大日[梵字]字が説き[梵字]字[梵字]字
が説き法法が説くといへり云々さてこの神誓はより
て日は月は人の多くなるゆゑ大祓詞は國中爾成出武天
之益人等とといへる祝詞考はさて此人は此國の人がい

ふなれどそのもと天の神の生給ふよしなれば天之とか
めいふなりといへるが後釋は凡て天之某といふはもと邇
々藝命の天降ましし始メ天より持來つる物を云と又天の物
になぞらひて造れる物なぞらひてせる事にいへるが廣くなり
て必しも然らぬ物にも事にもなべてやめていふことくなれ
るなり天之益人も然なり又思ふにもと高天原の人草漸
に多くなるが此國のも多くなることの高天原に同じく
ればいふにもなんら考にそのもと天ツ神の生給ふよしな
ればといへるるは心得がたしといはれさるべきことにさ
れどそがことのなごりに高天原の人草といへるにいふかし

我神典の上にては天國(ツ)と底國(ツ)とにはたゞ神々のみあり
て凡人のあることはあらざるなり青人草はたゞ此中國(ツ)
に成出生出(ナリイデウマレイデ)てあるのみなり神と人とあるはたゞこの中(ツ)
國のみなりこのことと佛經にとけるところと全く同じけ
れど紀の一書に天照大神復遣天熊人往看之(シ ヲ テミシム)といふことと見
ゆれどこは熊人といへども凡人にてはなくて神なること
とこの狼のことが大口の真神といへども其實は狼にし
て神ならぬとうらうへに考て知るべしその名のみにみ
まよへるがごとくに見ておもひあやまることなせそ宣
長ぬしは神代の人は皆神なりといふごとくなるにおもひあや

まれたるは似たり神代より神と人とへだてことなるものにて
しかるに人はみな神の子孫の人と凡人の子孫の人とのたが
ひあるなりこれ神國のいふときくところにて御國の人草
はよし神孫ならぬものにても天神の大命もて二命のも
のしたまへる御國へ神誓に引きて生れ出るもののゆゑ天
孫の民草にして神民なりこのゆゑに天之益人といふな
り天之何といふことは天之沼矛天之御柱などいふがごとき
まて神名には天之御中主といふがごときなり好き物が
すべて天の何といふことは天竺にても云へりいな
ゆる天馬などいふこれなり彼國は梵天ののしける國ゆ

ゑはしるしりときけり謂黄泉津大神とは紀一書に吾與汝
已生國矣奈何更求生乎等と見えたる鎮火祭の詞に吾名
妹能命波上津國乎所知食倍志吾波下津國乎所知牟止申
氐石隠給弖與美津枚坂爾至坐氐所思食久吾名妹命能所
知食上津國爾心悪子乎生置氐來奴止宣氐反坐氐更生子
水神匏川菜埴山姫四種物乎生給氐此心悪子乃心荒比曽
波水神匏埴山姫川菜乎持氐鎮奉禮止事教悟給支とある
はよりておもひ奉れば黄泉津大神となりおはしまして
下津國の鬼趣をよろしきそちはいざなひたまふとこ
とをよくおもひしるべしなり此祝詞と今の記説とへいさ

くだがへもどこは神業の不思議にていづもても人草が善
道にいざなふ為の神業なればこのさとみに實事と信知るべ
きなりこのくるところが佛家にては業力所陽感見不同の
異説といひこのくる難思の神業が如來の三輪不思議の徳
用とまをもなり黄泉津といふ津は天津神にてもなく國
津祇にてもなくこは黄泉大神なりとそれくたちまけし
このるべきこのさへつけくいふをりの詞なり「ツ」は「タウ」の約
りさる言なると故号謂の字がこまこのにおもひてそのむ
ねが知るべし追斯伎斯は追及しなり下の斯は過去し意
がいふ辞なり道が追及ふが斯久と古言に云りそは後方

より續て重なる意なれば万葉歌なども重浪又浪のしくしくなどいへると本同言にて今も物の劣優が云に及ものなのし及ぞなどいへり此は女神の黄泉比良坂にして男神に追及坐るが以の故に号道敷大神とふことがいへるなり道敷の道の字常には美知とのミ訓めども本言はたゞ知にて美知は御が添たる言なり記中に味御路などあるこれなりと記傳にいへりけざし道のミとふ言には御の義なるところもありまた見の義目の義に見べきむねもありと知るべしそのチは八衢などいふその千俣のチなりそれは道路とふ文字にてもありけし道反は坂路より

女神が塞て反し奉りし故の御名なり塞坐黄泉戸大神は佐夜理坐黄泉戸之意富迦微と訓べし延佳が黄泉戸𨖷塞坐と訓るは書紀に泉門塞大神とあるに依るなれど神名が逆に反て讀べく書る例なければ非なり葺不合命はありのぷこのご如是書べき文字なれば云ごとしさて上に引塞とある塞は佐閉と訓み所塞は佐夜禮理斯とよみ此の塞坐は佐夜理坐と訓べし同言も人の為と自ら然るとの差あり黄泉戸即ちの比良坂を云て書紀に泉門とある如く黄泉國に入門なり所謂は伊波由流と訓べし古言なりこは所言と云ことなり流々を由流と云は古言の格なり伊賦

夜坂は神名帳に出雲國意宇郡揖夜神社あり此處なりさ
て此の文に二の義あり一には黄泉平坂と云處ハ即出雲
の伊布夜坂のことなりと今人の云となり此に就ては伊
賦夜坂那理登伊布とよむべきなり今一には此黄泉平坂
のことを今は出雲の伊布夜坂と名くとなりこのときハ
出雲國之と云るハいかゞに聞ゆれども京にての言なれば
さも有なむさて書紀に或所謂泉津平坂者不復別有處所
但臨死氣絶之際是之謂歟と有るハこさかしき後人の書加へ
たる文にて云に足ぬことなり縦ひ撰者の言にもあれ謂
歟と疑へれば古傳にハ非ず己が推度なること明けしさ

て此伊賦夜坂乃黄泉平坂なることは當時伊邪那岐ノ神の
黄泉より還り給ふ時此地まで出給ひけん又出雲國ノ風土記
出雲郡宇賀郷ノ下ニ云北海濱有礒自礒西方有窟戸高各六尺
許窟内在穴人不得入不知深淺也夢至此礒窟之邊者必死
故俗人自古至今号黄泉之坂黄泉之穴也とあり此ハ伊
賦夜坂とハ遥に隔りて別なれど是も黄泉に通ふ一の道
なるべしと記傳にいへり出雲國人のいへるにハ宇賀山の
ふもと宇賀郷奥宇賀村にこの坂穴あり今にてハ楯縫郷
と云といへり此文をば其いまだ神世の比良坂は今謂出雲國
之伊賦夜坂是也とふ意に見るべしさて男神の語に愛我

那邇妹命汝為然者といはれかくてすなはち追來ましける時の
女神の御形はよしなし御怒ありて坐とも宇士多加禮斗呂呂
岐弖ましつる御ありさまにてはなかりけるべしそは愛といへる
語にて志るありしは志らるゝなりこは書紀に猶如生平出テ
迎共語ニルと有るからもさあるにあるべしといへることは九人の亡霊
なも有ることなりけるそんや今ともなさるは大神の神業な
るなりや

略解古事記巻第五終

国立公文書館
National Archives of Japan